

令和元年度 第 6 回 モビリティ・イノベーション連絡会議 議事概要案

1 日時：令和 2 年 2 月 13 日（木）10:00～11:30

2 場所：TKP 神田駅前ビジネスセンター ホール 5F

3 出席者

構成員 金沢大学 菅沼教授（Skype）、慶應義塾大学 川嶋名誉教授、筑波大学 伊藤教授（Skype）、筑波大学 川本教授、東北大学 鈴木教授（Skype）、日本大学 原口上席研究員、明治大学 中山教授、法政大学 今井教授、慶應義塾大学 植原准教授、東京大学 垣内教授、名古屋大学 倉地特任准教授、東京大学 佐倉教授、横浜市立大学 中村教授（Skype）、国立研究開発法人産業技術総合研究所 北崎センター長、一般財団法人 日本自動車研究所 内田副部長、理化学研究所 中川グループディレクター・小出研究員、東京大学生産技術研究所次世代モビリティ研究センター／東京大学モビリティ・イノベーション連携研究機構 須田教授・中野教授・鹿野島准教授・岩崎特任研究員・霜野特任研究員・内村特任研究員・梅田特任研究員

オブザーバー 内閣府 村田氏、国立研究開発法人新エネルギー・産業技術総合開発機構 渡辺氏、田中氏、林氏
事務局 一般財団法人計量計画研究所（牧村氏、馬場氏、関本氏）、社会システム株式会社（坂下氏、大山氏）
支援 氏）

4 議事概要

（1）須田機構長 挨拶

（2）前回議事概要の確認

（3）自動運転関連研究のデータベースの拡充

・資料 2 について説明。

（主な議事）

・柏の葉キャンパス駅～東京大学柏キャンパス間の自動運転バスについて、他の地域で同じようなことをやるとすると、どのような手続きが必要なのか。

・バス会社と貸切輸送契約をしている。車両は企業からバス会社へのリースとし、さらにリース会社を介しているのが一つの工夫。損害保険にも加入している。緑ナンバー（一般貨物自動車運送事業）を取得しており、それも一つのハードルである。

・「サービスに応じた ODD の設定」として、領域を限定するということを前提で考えれば、地域専用車という定義ができ、実用化に向け、条件を付けて数値を出すところからスタートし、さらに経験や勉強を進めて幅広いところへ提供していくことが順当なアプローチではないか。

・複雑な ODD の対応関係について課題を整理する必要がある。

・スイスのシオンでポストバスが運営している自動運転バスが 2016 年ぐらいから運行を開始しているので参考になるのではないかと。何より参考になるのは事故を起こしていることである。

・今の日本の ARMA の動かし方であると、事故は起きようがないような状態でしか運行していないので、参考にしていきたい。

(4) 国際連携について

- ・資料 3 について説明。

(主な議事)

- ・Horizon2020 の EU との連携で何を獲得するのか、目的が明確だとよい。
- ・我々の取り組みとしては、ご指摘の通り目的がしっかりしてないとなかなか活動もフワフワしたものとなるので、具体的に何を求めるのかというようなことをクリアにしていかなないと手間暇だけかかって何も得られるものも少なかったり、無かったりということになりかねない。目的に何を求めるのかということをついにクリアにしたうえで取り組むことは常に頭に入れてアプローチしていきたい。

(5) モビリティ・イノベーション連絡会議のホームページについて

- ・資料 4 について説明。

(主な議事)

- ・本連絡会議のホームページ作成の企画を始めており、今年度、我々側の活動としてフレーム、スタンスを作っておきたい。
- ・各構成員については、組織の概要を記入し提出いただきたい。
- ・ホームページを見て、例えば関心を持って「入りたい」という人が出たときにどうするのか、規約のようなものは掲示するのか。
- ・規約を作ることを検討しているところ。
- ・加入をオーソライズするのはこちらの権限ですと書いておかないとならないので、そこは注意された方がよい。

(6) その他

- ・資料なし。

(主な議事)

- ・データベースの更新を 2/20 締切でお願いしているので協力いただきたい。
- ・アメリカやアジアとの連携もあってよいのではないかな。
- ・アメリカとの連携については、来年 7 月の会議に向け具体化する。アジアについては戦略的に対応しなければならない。
- ・自動運転車両と普通の車両の混在状態をどう解決するか、どういう道筋を立てていくのかアカデミアと省庁を含めて議論を始めてよいはずであるが、ぜひこの場からスタートしてはどうか。
- ・混在交通のような技術的な課題というのもみんなで持ち寄って議論することも当然あってよいと思うが、本会議とは別枠で考えなければならない。
- ・具体的に、何をやるからどれぐらい経費が必要なのかといったことがないと予算等を確保できないので、そういった資源の裏付けをとれるような具体的な材料を用意するというようなことを取り組み、いろんな可能性がある予算枠があると思うので、そういうところにチャレンジしていければと思う。

(7) 今後のスケジュール

- ・来年度の開催は 3 回とし、早い時期からの開催を予定する。

以上